

聖 書：ダニエル 4：1～37

説教題：いと高き方をほめたたえ

日 時：2014年12月7日

この章でバビロンの王ネブカデネザルが低められます。この上ない隆盛を誇っていた彼に大変な出来事が起こります。しかし幸いなことに、彼はこの経験を通して学ぶべきことを学び、以前よりさらに祝福された状態へ導かれます。そのことを彼自身がこの章で証ししています。

まず1～3節はネブカデネザルによる贊美です。ここはこれから見る出来事を彼がみな経験してから書いた部分でしょう。「ネブカデネザル王が、全土に住むすべての諸民、諸国、諸国語の者たちに書き送る。あなたがたに平安が豊かにあるように。いと高き神が私に行なわれたしるしと奇蹟とを知らせるることは、私の喜びとするところである。そのしるしのなんと偉大なことよ。その奇跡のなんと力強いことよ。その国は永遠にわたる国、その主権は代々限りなく続く。」こう述べてから彼は自分の体験を話して行きます。まず語られていることは、ネブカデネザルの繁栄と高ぶりの罪についてです。王は宮殿で栄えていた時に一つの夢を見ました。それは王を恐れさせ、脅かすもので、王はバビロンの知者をことごとく連れて来させて解き明かしをさせようとします。しかし誰にもそれができません。そこで最後にダニエルが呼ばれて、彼がその夢を解き明かします。まずネブカデネザルが見たのは、地の中央にある非常に高い木でした。その木は生長して強くなり、その高さは天に届いて、地の果てのどこからも見えました。その葉は美しく、実も豊かで、すべてのものの食料があり、その下では野の獣がいこい、空の鳥が住み、すべての肉なるものが養われました。ダニエルはこの非常に高い木はあなたのことです！とネブカデネザルに言います。これは彼の繁栄ぶりを描いている夢である、と。全世界の頭として、またすべてのものを支配している君として、そのように描写されています。しかしこれには続きがありました。次には聖なる者が天から降りて来て、その木を切り倒せ！と言います。枝を切り払い、葉を振り落とし、実を投げ散らし、その下から獣や鳥を追い払え！と。これは何を意味するものでしょうか。ダニエルは、それはあなたがそのように低くされることだと言います。高い木が切り倒されるような扱いをあなたは受ける。なぜそんなことになるのでしょうか。それはネブカデネザルが高ぶりの罪を犯していたからでしょう。

ここに改めてダニエル書の基本メッセージである「この世界の主権者は神である」というメッセージがあります。どんなに世界を手中に収め、その上に君臨する王でさえも、神の下にある存在でしかない。その王が正しくなければ、神がこれを低め

る。神はネブカデネザルよりもさらに大きな主権を持つ方であり、この方の前に正しくなければ、どんなに強い王もネブカデネザルのようにされるのです。

しかしここには神のあわれみも示されていました。木は切り倒せ！と言われましたが、15節に「その根株は地に残し」と言されました。すなわちこの木は完全に滅ぼされるのではない。そこからもう一度成長するための根株は残された。おそらくこれをしっかりと守り、保存するためでしょう。そこに鉄と青銅の鎖がかけられました。そして26節にあるように、天が支配するということをあなたが知るようになれば、あなたの国はあなたのために堅く立つだろうとダニエルは言います。

そこでダニエルは王に悔い改めを勧めます。27節：「それゆえ、王さま。私の勧告を快く受け入れて、正しい行ないによってあなたの罪を除き、貧しい者をあわれんであなたの咎を除いてください。そうすれば、あなたの繁栄は長く続くでしょう。」ネブカデネザルはこれにどう応答したでしょうか。28節以降を見ると、残念なことに彼はこの悔い改めのチャンスを生かさなかつたことが分かります。一年間の猶予があったのに、彼はダニエルのメッセージを心に留めず、バビロンの壮大な建築物を眺めて自らを誇りました。29～30節：「12か月の後、彼がバビロンの宮殿の屋上を歩いていたとき、王はこう言っていた。『この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。』」こうして彼が高ぶりをやめなかつた時に、その権力の絶頂期に、神のさばきが彼に臨むこととなつたのです。

これは決して私たちに無関係な話ではないでしょう。私たちはネブカデネザルのように世界を治める王の地位にはありませんが、それでも高ぶる心を持ちやすい者です。人と比べて自分に優れた点があると、つい自分を誇り、自分に栄光を帰そうとします。人より学歴が上だったり、良い地位についていたり、良い給料をもらい、良い生活をしているようだったり、・・・。あるいは人より常識や教養を心得ていたり、健康だったり、美しかったり、良い身なりをしていたり、・・・しかしこの章から教えられることは、そのような状態にある人は大変危険だということです。私たちは神の前での自分の問題は私の弱い点、足りない点、力のない点にあると思いやすいのですが、実は気をつけなくてはならないのは私の強い点、得意な点、人より勝っている点にあるのです。あるいは成功の体験、私が出した良い業績、良い成績・・・。それによって高ぶり、自己満足し、神に頼らなくなってしまう。ネブカデネザルに問題が起きたのはいつだったでしょう。4節に「私の家で気楽にしており、私の宮殿で栄えていたとき」とあります。また29～30節にあるように、自分の成し遂げたわざを見て、この上ない良い気分でいた時です。私たちはそのように満足し、繁栄した状態にあると、自分の心を点検しようとしなくなります。私はうま

く行っている。私のどこが悪いのか。これは私が良くやっているからだと高ぶる。そしてそのことが神の祝福の妨げとなるのです。神はその人をそのままの状態でよしとされません。その者を低められます。その人は厳しい取り扱いを通して、大切なことを学ぶように仕向けられるのです。

ネブカデネザルにはどんなことが起こったでしょうか。33 節：「このことばは、ただちにネブカデネザルの上に成就した。彼は人間の中から追い出され、牛のように草を食べ、そのからだは天の露にぬれて、ついに、彼の髪の毛は鷺の羽のようになり、爪は鳥の爪のようになった。」 後に 34 節で「理性が戻って来た」とあることから、これは人間の理性を失った状態だったのでしょう。そして 16 節にあったように、人間の心の代わりに獸の心が彼に与えられた。この結果、彼は自分を動物と錯覚するようになり、からだは人間のまま、獸と一緒に生活するようになった。衛生にも気を使わなくなり、髪の毛はぼうぼうに伸び、爪も鳥の爪のようになった。彼は野獸の中で乱れた格好をした哀れな状態となつたのです。

しかし定められた期間が終わります。これは永遠のさばきではありませんでした。ネブカデネザルは目を上げて天を見ます。彼は錯乱した状態に陥りましたが、まだ人間として神を仰ぎ、応答する力が残されていました。彼はそこで正しい目で神を見上げます。自分が主ではなく、天の神こそが主であると知ります。すべての良きものはただ天から与えられることを認識します。その時、彼の心には人間の理性が戻って来た。これはただ神のあわれみによることです。こうして彼は自分を取り戻し、今や自分と世界と、何より神に正しく目が開かれた者として、天の神を賛美します。今や自分をたたえるのではなく、いと高き方をほめたたえます。そして 26 節にある通り、もとの繁栄を回復し、以前にもまして大いなる者となります。それで再び高ぶることなく、天の王を賛美し、「神は高ぶって歩む者をへりくだつた者とされる」との言葉をもって 37 節を締めくくっています。

これはネブカデネザルについての話であるばかりでなく、イスラエルに希望を与えるメッセージでもあったでしょう。王は高ぶりの罪によって恐ろしい状態に落とされました。悔い改めて罪を赦され もとの状態へ、いやもっと素晴らしい祝福へ回復されました。異邦人の王さえそのように導かれたなら、主はご自身の民にはなおさらそのようにしてください。イスラエルはこの時、捕囚の苦しみにありました。しかしそんな自分たちも赦され、回復されることができる。今の状態が最後ではない。その先に、神はなお優れた状態を備えてくださっている。

これは私たちにとっても同じでしょう。私たちももしかして今、低い状態にあるかもしれません。人間の中から追い出され、野の獸とともに住むというようなつらい状態にあるかもしれません。しかしすべてのことが満たされ、繁栄した状態にあ

っては、私たちは自分を正しく省みようとしません。いつしか慢心する方向に傾きがちです。そんな私たちは危機的な状況に直面させられる中で目を覚まされ、神との関係をもう一度問い合わせし、靈的な事柄が一番大事なことだと考えさせられるのです。神はそのことを、私たちを低い状態に置く中で教えてくださる。ですから苦しみの状態は否定すべきものではなく、神が私たちに大切なことを教え、一層私たちを祝福してくださるための特別な導きの時なのです。そのことに希望を抱いて、私たちも澄んだ目で天を見上げ、神のあわれみの導きを待つ者でありたいのです。

このネブカデネザルの話を聞く時に思い起こさずにいられないのは、これと対照的な王のことです。すなわちイエス・キリストという王のことです。ネブカデネザルは誇るものを持たないのに、むなしく自分を誇りましたが、キリストは反対に誇ることはいくらでもできたのに、ご自分を無にして、このクリスマスの時、私たちの世界に下って来てくださいました。なぜそのようなことをされたのでしょうか。それはご自身の民である私たちを救ってくださるためでした。本来私たちが高慢の罪ゆえに、神への反逆ゆえにさばかれなければなりませんでしたが、その罰を代わりに担うために、キリストは低くなつて入つて来て下さいました。そして死に至るまでご自分をささげて私たちを贖うという父なる神のご計画を最後まで果たしたがゆえに、父はこの方をすべての名に勝つて高く上げられました。今やキリストは私たちを祝福するためのすべての権威と力を勝ち取つて天の高きにおられます。私たちが神のあわれみによって高くしていただけるのは、このキリストのゆえです。今日の章は決して、私たちが自分を低めれば、それが功德となって神に賞賛され、高くされるという話ではありません。私たちがへりくだるべきは当然のことであり、それをしたところで何も偉くはないのです。そんな私たちが引き上げられ、祝福していただけるのは、ただ神のあわれみゆえです。神はそのためにキリストを遣わし、その方のへりくだりと十字架の犠牲によって私たちの罪を赦し、そしてキリストと私たちを結び合わせることによって、キリストが勝ち取つたすべての富に豊かに私たちをあずからせてくださる。へりくだる私たちが神から祝福をいただけるのは、私たちのへりくだりに価値があるからではなく、ただキリストのゆえなのです。

この主権者なる神の前で、私たちは何を考えるべきでしょうか。今日見て来た 3 つのことを最後にもう一度まとめたいと思います。一つ目は私たちは改めて主こそ主権者であると仰ぎたい。時の王ネブカデネザルも、この主の下にあります。どんな国のどんな為政者もそうです。その者が高ぶるなら、神はいつまでもそのままにはしておかれない。必ずその者を低められる。そういう主がこの世界を支配しておられます。

二つ目は私たち自身もこの真理の前でへりくだらなければなりません。私たちは

今日も自分が生かされ、多くの賜物を頂いて守られていることを神に感謝して礼拝したいと思います。すべての良きものは神から来ています。私たちの生活の守りも、健康も、財も、…。それらすべてのことのゆえに神に栄光を帰し、神を賛美したい。もしそうせず自分を誇るなら、その人は低められます。ネブカデネザルのような扱いを受けることになります。

そして三つ目は、自分は今、低められている状態にあると思うなら、それは特別な神の導きの下にある時だと受け止めたい。神は私たちをそこに置いて、よりきよめ、私たちが眞の祝福を受け継ぐ者となるように訓練し、鍛えてくださっている。そしてあわれみをきちんと注いでくださっています。神はこの時、私たちにキリストを遣わして下さいました。今どんな中にあっても、へりくだる者を神はこの方にあって高くしてくださいます。その特別な学びの課程を修了した暁には、神は以前に勝る祝福をもって、ご自身に目を上げる者たちを豊かに祝福してくださるのです。